

滞日一年

李 汝 松

わたしはいつもこう考えている——日本語を本当に自分のものとするためには、日本に行き、日本人の中に入って長く生活しなければだめだと。わたしの一年間の日本滞在はもうすぐ終わりの時がやって来ることになるが、ふりかえってみると、「やはり日本にきてよかったなあ、しかし、一年間という月日も研究者にとっては何と短い時間でしかなかったか」読破しえた書籍を数えながら、つくづく感じる今日この頃である。

旧友との再会

中日両国が国交回復して以来、両国の友好関係は一層密接になり、学術交流もますます一層さかんに行われるようになってきた。近年来、古都西安市に在る西北大学を訪問される日本人も大へん多くなってきた。西北大学で日本語、日本文学を専攻するわたしは職務の上で多くの日本人と知合いになる機会に恵まれていた。日本の友人達は別れ際にいつもきまって「日本にいらっしやい」といった。わたしには早くから訪日の願望があるにはあったが、はじめの

一九八二年四月、わたしは二度目の日本の土を踏んだ。中国で長年日本語方面の仕事にたずさわっている私にとって、これは何と喜ばしいことであつたらう。わたしの今度の来日は、中国西安の西北大学と同志社大学との学術交流協定にもとづく客員教授としてお招きをうけたからである。三年前、わたしは第一回西北大学訪日団に随行して初めての訪日をした。その時の訪問で得た成果の一つはわたしの属する西北大学が同志社大学、京都大学とそれぞれ姉妹校としての関係を確立したことであった。わずか二週間の訪日でしかなかったが、長い間あこがれの気持をいだいていた国にき

て、日本のいろいろのことを知ることができ、本当にいい勉強になった。しかし、もっと多く日本の実際を知り、さらには私の専門とする日本語と日本文学の研究を押し進めるためには二週間は余りにも短く、やはり物足りなさを覆い隠すことはできなかった。帰国に際して、わたしは、ぜひもう一度日本にきて、日本人の中に入って、長期間、ゆっくり日本語と日本文学を研究したいという願望が心の底から湧いてくるのを強く感じていた。わたしのこの願いは同志社大学と西北大学のご努力によって、とうとう二年後に叶えられることになったのである。

頃は、日本に行くなんてとても想像もできないことだった。ところが幸いにも近年の両国友好往来の大発展がわたしのこの夢の夢をとうとう一九八〇年に現実のものとする事になった。

日本人の旧友と日本で再会することはわたしにとって何よりの楽しみとなった。同志社総長上野先生との再会は三回目、同志社大学長松山先生との再会は二回目だった。上野総長とは一九八〇年六月、わたしたち西北大学訪日団が同志社大学を訪問したときはじめてお目にかかり、その翌年、こんどは上野総長が同志社訪中代表団を率いて西北大学を訪問されたときに西安でお目にかかった。同志社訪中代表団西安滞在の三日間、わたしはずっと行をとともにさせていた。また総長が西北大学で学術講演をなされたときには、わたしは通訳の任に当たらせていただいた。八十歳というご高齢なのに、二時間の講演を立ち通しでなされた。西北大学の郭学長が「お掛けになってお話し下さい」と何回もおすすめしたが、「坐ったら精が出せない」といっておききいれにはならなかった。華清池近く

にあるあの急峻な驪山でも上野先生は中腹の亭まで自らのぼられた。同志社本部の木村健二先生とも三回目の再会だった。一九八〇年の冬の初め、同志社代表団の訪中準備のため、先生は西北大学に来られ、そして同志社代表団の秘書長として西北大学を再訪問された。その後、わたしと木村先生は西北大学と同志社大学の連絡の懸橋としての役割を果たすこととなった。さらに文学部の森浩一先生、玉村文郎先生、浜先生、経済学部の笹田先生、尼崎にお住まいの藤本先生、京都大学教授上田正昭先生などの諸先生方とも何回もお目にかかり、大変お世話になった旧友の方々である。

山の国

現在わたしの住む同志社大学外国人教師館のある京都市岩倉地区では、前を見ても山、後を向いても山、左も右もすべて山だ。すなわちわたしは山に囲まれて住んでいるのだ。わたしは日本にきてから関西のいくつかの土地へ行ったことがあるが、どこへ行っても山を見ることができた。関東地方では東京周辺しか見ていないが、行き

帰りの鉄道線路の両側も山々だった。日本全体はどうなのか詳しくは知らないが、わたしの行った所はすべて山がつづいていて。このことから、日本は島の国だけではなく、山の国でもあるという印象をわたしは強くもっている。

わたしは山がすきだ。わたしのふるさと江蘇省沛県は平野で鏡のように平らな土地である。よく晴れた日には遠くまで見ることができる。しかし山を見ることはできない。わたしが生まれて初めて山を見たのは小学校を卒業して中学校に進学したときだった。当時、ふるさとはは中学校がなかった。江蘇省徐州市の中学校に入った。徐州は京都と同じように山に囲まれた所である。殆ど禿山で、木は少なかった。それでもわたしは初めて山を見て、非常に嬉しかったし、また驚きもした。あんなに大きい石の塊が天にも届きそうに高く聳えているではないか。本当に不思議なものに出会ったと思ったものだった。冬休みで帰省したとき山のことを友だちに話してきかせたら、友だちもみんなはかと口を大きくあけて面白そうにきき聞いていた。

十年前、わたしは徐州から西安に転動した。西安のあたりも、八百華里の秦川」と言われる土地柄で山は少ない。よく晴れた日に、南の方を眺めると、地平線に起伏する青いものがかすかに見える。有名な秦嶺である。日本の山もすてきだ。いつも緑に包まれて、冬になっても青々としている。日本には高い山は少ないが、山はいつでも緑色で美しい。わたしはこの感じを次の句にまとめた。

「山不高而青葱、水不深而澄清。」

さしみは大好き

「さしみ好きの日本人」という言葉はずっと以前から知っていたが、日本に来るまでは食べるどころか見たこともなかった。日本に来ることができたからには、ぜひ一度食べてみたいと心ひそかに思っていた。初めてさしみを食べる機会は同志社大学を訪問したときにやって来た。一九八〇年六月、同志社大学を訪問した。昼ご飯として出された弁当（弁当はこれで二回目、大阪大学を訪問したときも弁当が出されたが、さしみはなかった）の蓋をあけてみる

と、さしみが入っているではないか。あつこれだと思つて大変嬉しかった。さしみは「生魚片」と中国語に訳したが、このさしみは薄片ではなく、正方形の肉の塊だったので、外人には生の魚を食べる習慣がないので、外人達はみんな食べなかった。わたしは日本語の先生をしているのだから、過去においてははずつと食べる機会にめぐまれないが、いまそれを目の前にしておいしくうと、おいしくなろうと、とにかく一度この口で食べてみなければならぬと思つて勇氣を出して食べてみた。そのときは美味しくは感じなかったけれども、とにかく食べた。さしみの味がわかった。

これからは学生達にさしみの味までも紹介できると思うと嬉しかった。その後も何回かさしみを食べる機会があった。どういふわけか回を重ねるうちに、さしみをだんだんおいしく感ずるようになってきた。さしみは本当に不思議な味わいである。次にすきやきである。すきやきはいいのだが、付けて食べる生の卵はちょっと不気味だった。「日本を長く離れると、みそ汁がなつかしくなってきた」とお名前は忘れたが、

一人の日本人作家が外国からかえつてこう書いていた。わたしの方は日本での滞在が長びいてくると、お粥をとでもなつかしく思うようになってきた。森浩一先生が夕食にご招待くださったとき、何かお好きなものがありますかとおたずねになり、わたしはたちどころに「お粥が食べたい」と答えた。「お粥？ 困つたなあ」と森先生は溜息をつかれ、しかし、八方手をつくして本当にお粥を食べさせてくださった。そのとき森先生のご親切には、お粥を前にしてわたしはつい涙をさそわれたほどである。

氏名は読みにくい

日本に来るまえにも、西北大学を訪問される日本人にはよくお目にかかった。名刺を出されて一番困つたのは日本人の名まえを正しく読むことが大へんむずかかったことである。たとえば十人の代表団が来訪されるとした場合、その中には同じ名字の人は殆どいなかった。必要に迫られてわたしは日本人の名字を覚え始め、五百ぐらい覚えたが、それぐらいではやはりだめだった。一体日本にはどれぐらいの名字がある

だろうという疑問が湧いてきて、そのときからこの問題に強い関心を持つようになった。中国商務印書館が出版した「日本姓名辞典」には六万の日本人の名字が集められている。日本にきてから、丹羽基三氏が書いた「姓氏の語源」を読んだ。そして日本にはなんと十二万以上の名字があることがわかった。これは実に驚きであった。一億の人口に十二万以上の名字がある。これも世界の不可思議の一つではなかるうか。ただ五百の名字を覚えただけではとてもだめだということがやっとわかった次第である。わずかに二百四十分の一しかなかったからである。

日本には名字が多いばかりでなく、二つの漢字を組みにして使うのが普通である。三つ以上の漢字が使われている場合も少なくはない。また同じ漢字でも読み方が違うのもまれではない。昨年、同志社大学にやってきてまもなく、教務部長の吉川先生のことにについて話をしていたとき、「よしかわ先生」と私がいうと、話相手の森博達先生が「いや、きっかわ先生です」と訂正になった。わたしはそのときたいへん

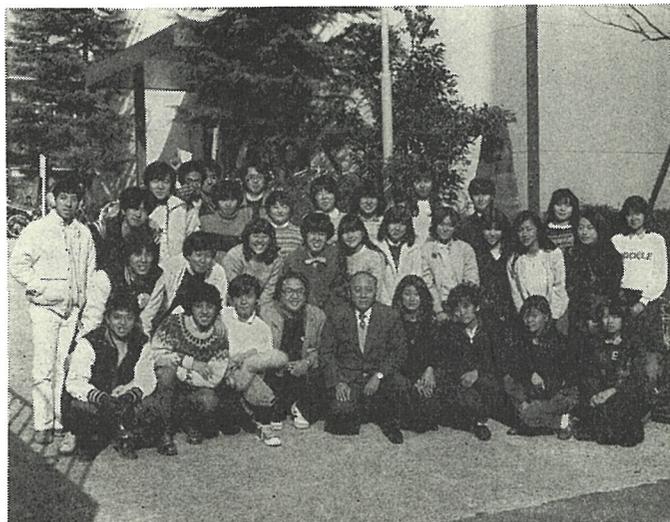
不服に思ったものである。三年前に亡くなられた日本の有名な杜甫研究家吉川幸次郎先生は「よしかわ」ではないだろうか。あの「三国志」「新太閤記」や「宮本武蔵」を書いた有名な文学者吉川英治氏も「よしかわ」ではないだろうか。後日、吉川教務部長ご本人にお目にかかったとき、確認してみた。「わたしはきっかわです」と答えられた。わたしはかぶとを脱がざるを得なかった。同志社大学で講義を担当するようになってから、受講学生の名簿がわたしに渡された。その名簿には学生の名まえがカタカナで書かれてあったので大へん助かった。そう、わたしが受け持つクラスには浦上は二人いた。一人は「うらかみ」、もう一人は「うらがみ」だった。

名字(姓)ばかりでなく名まえ(名)も読みにくい。ある日病院へ行った。看護婦さんが廊下に出てきて「野山さん」と患者の名字を呼んだ。きこえなかったのだろうか、すぐには返事がなかった。「野山げんいち(元)さん」とまた呼んだ。今度は一人が立って「わたしはもとかずです」と訂正した。

親切で、礼儀正しい

今回日本にきてまもなくのことだった。ある日、学校からかえりみちのついでに、京福電車岩倉駅近くの書店に立寄って本をあざった。書店を出てかえろうとすると、急に雨が降りだした。とてもひどい雨だった。これは困ったなあと思って、書店の主人に対して「近くに傘を売る店はありませんか」と尋ねると、その主人は黙って奥から雨傘を持ってきて「どうぞこれをお使いになって下さい」と差し出されたので、わたしは大変心を打たれる思いがした。身分も名も知らない外国人に対して日本の街の人がこんなに親切にするとは思っていなかったからである。わたしはその傘を受け取って、「明日、必ずお返しします」といつて宿舎にかえった。翌日、朝起きると、すぐ何よりも先にその傘をかえしに行った。ところが書店の主人が「わざわざ、どうもすみません」といわれたのでまた驚いた。すまないのはわたしの方だと思ったからである。

日本では、どここの商店や飲食店へ行った



わたしが受け持った中国語ⅡA—2クラス—同と

ときでも「いらっしやいませ」とか、帰りがけには「どうもありがとうございまして」とか、「おおきに」とかいうあいさつの言葉が耳に入ってくる。どんな小さなものを買っても「ありがとうございました」

と感謝の言葉がのべられる。来日当初はこんなことでも驚きの一つであった。中国では、感謝の言葉をいうのは商店員ではなく、お客様の方だからである。しばらくの間はどうしてもすっきりした理解をするこ

とができなかった。その後、いろいろ考えに考えたすえ、やっとわかってきた。中国の商店は国営のものが中心で、お客様が物を買えば商店員は手数や面倒をこうむることになるからお客様が店員に対して感謝の言葉をのべるのがあたりまえのことになっていく。しかし日本では商店でも飲食店でも普通は個人や企業が経営していて、お金もうけのために店を開いているのである。お客様が自分の店の商品を買ってくれたら、お金がもうかることになるから、感謝の言葉を商店員がのべるのもまったくあたりまえではないか。だからきいたのかは

忘れたが、「お客様は神様、消費は王国」と。たしかにそうだ。日本人はお互いに九十度近くもおじぎをしてあいさつをする。お互いにおつかり合うことがあっても、両方も「すみません」とあやまり合う。これはいいと思う。わが国は昔から「礼儀の国」といわれているが、この点ではやはり日本に学ぶ必要があると思う。

美しい国

「日本の印象はいかがですか」とたずねられたら、「日本は美しい国です」と躊躇せずに答えるだろう。わたしの行くことができた所はごく限られた一部分にしかすぎないが、どこへ行ったときでも美しいという印象を得た。京都で丸一年暮らすことになったが「京都は静かで、緑豊かなそして花いっぱい都市だ」という感慨は深く、とくに親近感をもつ風情がこの街にはあった。京都にはお寺がたくさんある。その建築はとてすばらしい、整然と区画された京都の町並もまたきれいなものである。どのお宅にも花や木や竹などが植えられていて、このことはたとえ庭が小さくても変

わりはない。造り山や泉のある大きな庭も珍しくはない。四季にわたって花に飾られた花の都だという印象も決して誇張ではないと思う。わたしの詩づくりはつたないけれども、この印象を次の四句にまとめてみた。

小小庭院一線天、巧手精工実堪讚。

松竹常伴四季花、太湖石中流清泉。

去年の夏休みに、同志社大学へ留学している于さん周さんと一緒に東京へ遊びに行ったことがある。日本の日光は大へん景色のいい所だとずっと以前からわたしは知っていた。機会があればぜひ一度行こうとかねて決心していた。東京から電車にのれば二時間ばかりの所にあるということなので、我々は朝早く起きて出発した。その日はあいにく雨で遠くを見わたすことができなかつたので残念に思つたものだった。とくに口惜しかつたのは、あの有名な瀧が霧にかすんで全然見えないことであつた。中禅寺湖も霧がうすれたときにほんのぼんやりとしか、見るができなかつた。それでも美しいなあと感じることだけはでき

た。車にのつてあんなに険しい山をのぼりつめて行くのも初めての経験だつた。山のお寺(東照宮など)も大変きれいであつた。東京旅行から京都にかえつてから、次の詩を書いた。

日光雲霧中、古庙多悠閑。

清泉山間遶、古木撐青天。

一山拔地起、山峰入雲端。

公路若盤蛇、登頂并不難。

「明鏡」山間臥、「銀河」当空懸。

遊人嘆不已、彷彿入九天。

(注)「明鏡」は中禅寺のこと、「銀河」は瀧のこと。ここではたとえである。

日本の物価

日本は工業国だから工業品は安い。それにひきかえ農産品は高い。このことは、わたくしが日本に来るまえにすでに知つていたことだったが、日本にきてみて、たしかにそうだという感を深めた。テレビもやすいし、カメラも安い。乗用車は殆どの家庭にある。それも安い。それらの工業製品の値段に比べて農産品はたしかに高いと思う。お

米や野菜は中国よりずっと高い。さつまいもやとうもろこしは中国では非常に安価に手に入るが、日本ではいやになるほど高価である。とうもろこしは一本で二百円ぐらいもする。これは中国のお金に換算すれば、一元五角に相当する。中国では三十本は薬に買えるだろう。或る日本人から聞いた話だが、中国を訪問したとき、街角の露店でやきいもを見つつけ一元のお金(日本の約百三十円にあたる)を出して買ったところが手に持ちきれない程沢山くれた。とても食べきれような量ではないので、通りがかりの子供たちと分け合つて仲良くたべたそうである。しかし、また同じ農産品でもとても安いものもある。それはみかんとバナナである。秋になると、どの果物店にも山のように積みあげられたみかんを見ることが出来る。安いときには三キロでたったの二百九十円だつた。この値段は中国のそれよりも安い。バナナは百グラムで十円と、野菜よりも安い。牛肉は肉の中では一番高く、とりわけ一番高いものは百グラムで二千五百円と書かれていた。それにひきかえかしわは安い。百グラム百円で買うことも

できる。これは最上牛肉の二十五分の一にすぎない。中国ではかしわは肉の中で一番高価である。そしてまた肉の中でいちばん上等の肉と思われる。わたしは日本にきてからいろんなものを買って沢山食べてみたが、私の感覚からすると日本の物の値段は本当に不思議に思える。高かるべき物はかえて安く、安かるべしと思う物はかえて高い。日本のみかんは種もないし、あまいし、値段も安いから、それこそ沢山買って食べた。

日本に何を学ぶか

私の見るところ日本は確かに科学も技術も発達しており、経済の面でも繁栄している社会だが、これは決して天から降ってきたものではあるまい。日本国民が長期にわたって汗水流し苦勞の末創り出したものである。日本は物的資源には恵まれていないが、その代わりとなつてゐる日本の資源は智力開發の重視と常に向上を求めてやまない精神だと思ふ。日本は古代においては、中国に学び、自國の古代文化を打ち建てた。近代になつてからはまたヨーロッパや

アメリカから近代の科学と技術を学んで自國の近代化に成功した。第二次世界大戦で國土はひどく破壊されたが、戦後廢墟の中から立ち上り、六十年代の經濟高度成長を経て今日の發達と、繁榮の國家を築きあげた。以前、時計はスイスが、自動車はアメリカが、カメラや光学計器は西ドイツがそれぞれ王座を占めていたが、日本は苦心に苦心を重ねて学び、創造し、ついにそれに追いつき、そしてそれを追いこした。この精神的財産こそが日本の物的資源の不足を補い今日の富の國を築きあげたのである。いうまでもなく、わたしたちは日本の科学技術及び經濟管理の經驗をいま学ぼうとしているけれども、さらには日本人のこの「怠らず励む精神」と「すでに立派なのに更に立派にしようとする精神」をも併せてわたしたちは学ばなければならぬように思ふ。

わが中華民族は世界のどの民族にも決してひけをとらない立派な民族であり、われわれの祖先は世界史上に比類ない輝しい古代文化を創り出したからには、その子孫たるわれわれも必ずやわが國を現代化された

社会主義國家として築きあげることができるとかたく信じてやまない。

中国西北大學助教
同志社大學客員教授

(本文は筆者が日本語で書いたものである)



回想の中の「出会い」

國分綾子

本棚を整理していて、ゆくりなくも亡き叔母が郷里岡山県高梁から出てきて同志社女学校に入学したころのことを書いた一冊の薄い本を見つけた。明治十七、八年のころらしい。

本の整理を後回しにして読んで行くほどに思いはさらに伸び、素朴で純粹だった当時の人々の姿がまざまざ浮かび上って来る。

というわけで整理作業はストップし、私は「同志社とわが家の先祖」みたいなこの原稿を書かせられることになってしまった。

私がかつたのは嫁いできた國分家を指すが、それは岡山県（備中）高梁の出で、夫の祖父は藩主板倉家の家臣として仕えていた。

後に町制が敷かれるや祖父は町長となり、老いては東京に移って俳諧連歌を楽しんだ人で、それを記録した和綴の本が何冊も残っている。

祖母は近郷の農家から興入れした、がちりとした体格の、働き者だったという。

家族の一人一人の衣料はすべて糸紡ぎから染め、織り、仕立てまで手を下し、その速いこと、仕事の美しいことは近辺の誰よりすぐれていたと評判だった。

この夫婦に長男（私の父）が生まれたころ（文久三年―一八六四）同じ土地に同じころもう一人の男の子が生れた。そのころ多産の貧しい家では、間引くと言って生後すぐ始末する事が行なわれていたが、この子もそういう運命になるところをこの祖

父夫婦が「一人でも二人でも手間は同じ、辛い乳の出はよいから分けましよう」と言って引き受けた。助けられた幼い生命は溢れる乳を分けられて健康に育つのである。

この人の名は留岡幸助。氏は長じてキリスト教の信仰を得て同志社神学校に入る。卒業後は北海道の教諭師を振り出しに渡米して行刑制度研究などを経て、独力で非行少年感化事業として家庭学校を作るなど、近代社会事業教化事業の先覚者としての生涯を終えられるが、これはずつと後のことである。

貧しい家の子が、士族の家で乳を貰って育つ間、幸助、幸助と人が呼ぶのに祖母は「人間に上下はない。幸助さんと呼びなさい」ときびしく直させたという。理屈でなく全く自分の考え方を持ち正しい事を主張する女性だったらしい。

この母にさらに三女一男が生まれるが長女國分三美（夫の叔母）は高梁の順正高女から十四歳で単身京都の同志社高等女学校に遊学の志を立てるのである。

今で云えば何でもなしのようで明治十七、八年のころという地方からのこの挙は

ことに素朴な祖母にとつて容易ならぬ決心の要る事ではなかったか。

三美が出立の日、その母は高梁川の防堤を俤に乗って遠去かつて行く娘をいつまでも見送った……と本棚から探し出した薄い本（祖母の追悼録）には書かれてゐる。

そこには乳兄弟である兄（私の父）と留岡幸助氏の少なくない影響があつたのではないだろうか、とこれは今は聞くよしもない私の推測である。

とにかく彼女は京都につき、入学を終えた。

同志社では同級生に仲好くして貰つた。土倉まさ（のちに内田）、井上ふきさんたちがおられた、他山本久栄さんがおられたといふ。この人は徳富芦花の自伝小説「黒い眼と茶色の瞳」の寿代さんで芦花の恋人だつた。題名の黒い眼は校祖新島襄、茶色の眼はこの人を指す。

小説の中に清滝という一章があり、同志社の学生だつた芦花（小説では敬二）が丹波街道を歩いて清滝にいたり、川畔の「ますや」に宿をとるところが書かれてゐる。脚気をわずらい寿代との恋愛も暗礁に乗

り上げた失意の芦花は、ここで「レ・ミゼラブル」など人道主義の本を読み、孤独な人生を沈思しつゝ三週間を過ごし、「ますや」でもてなされる栗ごはんやゆで栗をたべる代金も底がついたところで去つて行く、

「ますや」は一家揃つて学生好きで、帝大（京大）同志社などの学生がくると心からもてなした。中でも「同志社の学生なら黙つて宿賃を箱に投げ込んで帰つても決して間違ひはない」とまで信用していたといふ話が残つてゐる。今でも往年学生だつた老紳士が同窓会場によく使うが愛宕参詣の旅宿らしくおおらかな広間の多い造りは昔と変わらない。渋皮を少し剥き残して炊く栗ごはんも普通りでなつかしい。

そういう「ますや」も清滝の風物も叔母の三美は見えていないにちがひない。「ミッシェンスクール」出の女書生といつた素気なさがその教養の中にあつた」と後年その長男が母と語つてゐるが、真面目な当時の女学生にはそんな暇もなかつたらうと想像する。

はたして叔母は経済的な理由からだろうが同志社には卒業まで留まらず、東京の青山学院へ移つて学業を終え、兄の親友と結

婚して能勢三美となつた。

昭和初年のころに法学部教授として同志社にいた能勢克男がその長男である。

さて、祖母のゆたかな乳房を分け合つた一方の私の父は、三島中洲先生に師事したが東上して法律を修め、検事正となりの中に朝鮮高等法院長を拜命し、退官後は東京に帰つて住んだ。

前後して留岡氏は非行少年のための施設、家庭学校をつくつたが、夫の両親は何かあると「これを家庭学校へ……」と抛金と物品寄託を忘れなかつた。

この家で祖母が亡くなつたとき、幸助氏は再度お別れに見えた、縁は長く続いたのである。

母は嫁の私によくこの話しをして聞かせた。

儒教的に見えたが遂には入信した父、教会の礼拝を欠かさなかつた母、叔母も熱心なクリスチャンの生涯を送つて逝つた。

素朴な信仰であつたが、これら一族に時代と環境と人との出会いを結びつけて考えないではいられない。

これを神の摂理というのだろうか……とも。

昭和三年同志社高等女子学部卒業・評論家

歌舞伎の世界だけなのか

西村 彰 朗

同志社に歌舞伎研究会という学生のサークルがある。あまり知られていないが、文化団体連盟に加盟するれっきとした研究会である。昭和三十三年に創立して、同好会からやがて研究会となり、文連にも加盟した。ことは創立二十五周年にあたる。

実は、私もこの歌舞伎研究会を卒業した。大学の法学部では、手形小切手法の島本ゼミに学んだが、いたって出来は悪かった。同級に法学部を首席で卒業して、松下電器産業に入った田中浄君がいて、ずいぶんと助けてもらったのを思い出す。ゼミで私が発表するレポートやらその問答集も全部、彼が用意してくれた。芝居を見たり、サークル活動にかまけて、ゼミをさぼりがちな私は、島本先生には不肖の弟子だった

と思う。だから、申し訳なく、同志社はいまだに歌舞伎研究会を卒業したということにしている。

昨春秋、この「エッセイ」の原稿を依頼された時、その後の歌舞伎研究会がどうなっているのか、ふと調べてみたくなった。新聞社の取材で同志社には週一回は顔を出す。ひまがあれば、キャンパスの掲示板を注意してみるのだが、歌舞伎のかの字も見ることがない。昔あった研究会のボックスを訪ねてみたが、他の、名前も聞いたことがないサークルが入っていた。だから、ずいぶんどぶさたのままになっていた。気がなり出したら、どうしようもなくなるもので、学生部に念のため、研究会の存否を聞くと、「ボックスの場所は変わった

けど、いまもちゃんと文連に入っていますよ」。さっそくその足で出かけた。何のことではない。新町校舎ではよく出入りしている考古学の森浩一教授の研究室のすぐ裏手にあった。

いま、歌舞伎研究会は十六人の小所帯である。文連でもおそらく最小のサークルだろう。幹事長は女性だという。私がここに在籍したのは三十五年春から四年間だったが、後半の二年ぐらいいの間に、会員がどんどん増えて、卒業の時は六十人ぐらいいの規模になっていたはずである。

研究会のボックスで数人の後輩と一時間ばかり話した。現在のようすをたずね、私たちが活動していたころの状況を説明したが、どうも話がうまくかみ合わない。歌舞伎についての見方がどうこうという前に、世の中の方がこの二十年ほどの間にあまりに激しく移り変わっていたのである。

小所帯になったいまも、毎年夏には信州方面で合宿を行っているそうだが、私たちのころは合宿が終わったら、そのまま東京へ出て、九月の芝居を団体で鑑賞するのが恒例だった。それで京都に帰ってくるのは

「東海道線が一番速い特急で七時間半ぐら
いかかったかな」というと、「へえ。信じ
られないなあ。新幹線は走ってなかったん
ですか」。

昨年の南座の顔見世で、初めて一等料金
が一万円の大台に乗ったことが話題にな
り、「ぼくらのころは千五百円ぐらいわっ
たなあ」といったら、またまた「へえっ」と
きて、「もういまじゃ、三階の四等席で
も見られませんか」と、ダメ押しされた。

それから大阪の歌舞伎座の話が出た。た
しか新派に坂東玉三郎が特別参加して、泉
鏡花の「夜叉ヶ池」か何かをやるというの
で、南座の顔見世よりも大学生の間では人
気になっているとのことだった。この歌舞
伎座は難波の新歌舞伎座のことである。
「いまの歌舞伎座ができたのは昭和三十四
年の秋で、その前はぼくの生家に近い千日
前にあってね。ほら、千日デパートの火事
があっただろう。あの火事でたっさんの死
傷者を出したところが、昔の歌舞伎座でね」と
いひかけたら、「へえっ。そんな火事あ
ったかな。ぼくらはまだ生まれてなかったの
では……」。

冗談じゃない。歌舞伎座が難波に引越
して、その跡に千日デパートが出来た時
は、たしかに生まれる前だったかもしれな
いけど、あの火事は、「君たちがピッカピ
カの一年生のころ……」と口まで出かっ
て、途中でやめた。年を逆算するのが
面倒になったというより、そんな話を繰り
返していたら、本題の歌舞伎談義にいつま
でたっても入れないからである。

大学を出る前後から、日本の高度成長は
始まって、上りつめたところで、頭から二
度ばかり油をぶっかけられ、目を覚ました
時は、低成長時代に逆戻りしていた。そん
なふうはこの二十年というのは大そう変化
の激しい歳月でもあったのだが、何か一言
いうたびに、「へえっ」とやられると、つ
くづく自分も年をとったものだと、考え込
んでしまう。

ところで、そんな変てこな気分を話を聞
いているうちに、研究会の活動でいまも昔
も変わっていないことを一つ発見した。会
員が全員そろって歌舞伎を総見していると
いうことだ。ボックスに居あわせた一人の
女性が「いまの大学の歌舞伎研究会で、総

見を続けているのは同志社ぐらいですよ。
ちよっぴり誇らしげに胸を張ってみせた。

歌舞伎の研究といっても、自分たちで芝
居を演じてみせるわけではないから、まず
ナマの舞台を見ないと話が始まらない。し
かし、京都に大阪を合わせても、一年間に
歌舞伎が上演されるのは多くて六、七回。
少ない年は顔見世を入れても三、四回であ
る。この数字は私が同志社に在学したころ
と、そう大差がなかった。問題なのはその
中身である。

珍妙なボックス談義から十日ほどして、
初めて現在の研究会の幹事長と出会った。
「いま研究会で歌舞伎十八番を調べていま
すが、私が実際に見たのは、鳴神と勸進帳だ
けなんですよ。だから、本を読んでもわか
らないことが多くって……」。彼女はしきり
とこぼすが、なぐさめることは見つから
ない。大学に三年もいたら、東京まで出か
けなくても、京、大阪で現在でもまず十五
回は歌舞伎は見られるはず。そうしたら私
たちのころなら「助六」とか、「暫」とか、
「毛抜」、「矢の根」ぐらいいまでレパートリ
ーは広まったにちがいない。もちろん歌舞

伎十八番だけがすべてじゃない。若い世代が歌舞伎を見る一つの入り口にすぎないものだと思う。しかし、その入り口でこんな調子だから、彼女の口にこそ出なかったが、近松の作品でも、また三大通し狂言の「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」にしろ、どれだけ見たことなのか、はなはだおぼつかない。

そういえば「関西で歌舞伎を育てる会」の組織が結成され、同会主催の公演が始まったのも、私が同志社を出てずっと後のことである。先にいった歌舞伎公演の回数の中に、この「育てる会」の公演（京阪で年二回程度）も含まれる。そうしていまだに必ず演目の一つとして「歌舞伎の見方」が入っている。

これによく似たことなら、三十七年の同志社大学のEVEで、歌舞伎研究会の主催で「教養としての歌舞伎入門―講演と実演の会」を開いている。明徳館の二十一番教室へ中村鷹治郎さんや嵐徳三郎さん（当時、大谷ひと江）、それに歌舞伎の下座音楽の人たちを招いて、歌舞伎のさわりのところを実演してもらった。経費が高くてつ

て、先輩のところへ頭を下げて回ったのを覚えていたが、木戸銭はビタ一文とらなかつた。

それがいまだに関西で数少ない歌舞伎公演の有料の演目の一つに納まっているのだから、この二十年の間に歌舞伎の世界もえらく変わってしまったものだ。

東京ではどうだろう。「歌舞伎の見方」

のたぐいは、国立劇場が毎年夏、高校生を対象にやっている。本興行の方は一年間に国立や歌舞伎座、新橋演舞場などを合わせると、関西で三年かかって見る分よりまだ公演回数が多い。質的な面では、歌舞伎を知らない歌舞伎俳優が増えるなど、色々と問題があるが、ここではふれない。

それよりも、私にとって歌舞伎という身近な事例をとりあげたが、同じような現象が他のジャンル、たとえば美術の世界で、音楽の世界でも見られないだろうか。出版が東京に偏在しているといわれて久しいが、政治、経済ばかりか文化までが中央に加速度的に集中してしまったのは、やはりこの二十年ちょっとの間の出来事のように思う。

とにかくいまの首都圏と京阪では、子どもの時から周囲の文化的な環境の落差があまりにも大きすぎるのである。このまま行けば、その差はますます拡大するばかりだろう。そうしてナマの実物に一度もふれることなく、東京で選別され、一方的に地方へ流してくる画一化された情報だけを甘受することになる。

私には、研究会の後輩たちが、いちいち「へえっ」といって驚いたことよりも、「大学に三年いて、歌舞伎十八番をたった二つしか見ていない」といった一言の方が、やはりショックは大きかった。

（昭和三十九年法学部卒。京都新聞社記者）